

新名祭に関する諸批判

ギン

2026年1月1日 初稿

目次

はじめに

背景

本文

1. 新名祭に対する批判

2. 茶久間ふく氏に対する批判

3. 夜学バーとの関係に基づく批判

あとがき

謝辞

はじめに

この文章は、筆者（ギン）が茶久間ふく（元亀川ふみか）氏主催のイベント「新名祭」に参加し、それを機に生まれた様々な考察をまとめたものである。

「背景」では筆者が新名祭に参加した経緯や、後述する「夜学バー」など、種々の固有名詞について触れる。「本文」では、まず第一章でイベント自体に対して、第二章で茶久間氏に対しての批判を示す。その後第三章では彼女と「夜学バー」の関係を参照した上で、イベント・茶久間氏双方に対する批判を示す。批評理論の用語を用いるならば、第一章と第二章が新名祭に対する内在的アプローチであり、第三章は外在的アプローチであると言えるだろう。「あとがき」では本文に入りきらなかった内容を補足し、「謝辞」ではこの文章の執筆にあたってお世話になった人々・著作物を紹介する。

この文章を読むにあたり、いくつかご注意いただきたい点を述べておく。

第一に、**筆者と茶久間氏は面識がない**と言って過言でない。その他イベント関係者とも、後述するさく氏を除いて面識がなく、新名祭開催にまつわる事象の多くを筆者は把握できていない。そのためこの文章に対する反論・指摘も十二分に存在すると考えられるが、より考察を深めるために歓迎する。思いついたことはぜひご発信いただきたい。

また、筆者の個人的事情や執筆の準備の関係で、文章の公開が非常に遅くなってしまったことに関しては弁解の余地もない。イベントの開催から一ヶ月以上が経過しているため記憶違いなどが発生している可能性があるが、何卒ご容赦いただきたい。

最後に、この文章にあるのはあくまでも筆者の目に映る範囲の問題点の指摘・批判であり、決して茶久間氏の人格否定を意図するものでないことは強調しておく。

背景

まずこの文章に登場する固有名詞について解説する。（敬称略）

・茶久間ふく

イベント「新名祭」主催者。旧名「亀川ふみか」。元夜学バー従業員。

・新名祭

茶久間氏の27歳の誕生日である2025年11月29日に入谷 SOOO dramatic!で開催されたイベント。

・夜学バー

湯島にあるバー。茶久間氏が数年間働いていた。店主のJacky氏による様々な「場」に対する思想を体現して営業されている。

・さく

2025年現在夜学バーで働いている青年。新名祭にてヘナタトゥー屋を出店した。メディアプラットフォーム noteにおいて、新名祭に対する感想を綴っている。

筆者はさく氏のSNSでの発信を通じて新名祭を知り、参加に至った。参加時点で、茶久間氏のパーソナリティや彼女が元夜学バー従業員であることは知らなかった。イベントに対して大きな期待を持って参加したわけではなかったがその実態は予想を下回るものであった。後に彼女が夜学バーの理念に強く賛同していた元従業員であることを知り、さらに疑問点・違和感が増えた。簡単に言えば新名祭の「場」としての性質は、夜学バーの目指すそれと大きく異なる—むしろ真反対のものであったように感じた。

新名祭開催直前の11月23日、夜学バー店主Jacky氏は『夜学バーのつくりかた。』を発行し、その理論と実践の体系的説明を試みた。その理解にあたり、新名祭に参加し

た経験は大きな助けとなると考えた。以上を踏まえ、筆者が新名祭に関して考えた様々な事柄についてまとめたのがこの文章である。

本文 1. 新名祭に対する批判

1-1 新名祭の概要

新名祭について考える際の起点として、このイベントの物語性および式次第について確認しておく。新名祭パンフレットには次のように書かれている。

27歳という節目に、名前をつけて祝いたい。

その思いから、この小さなお祭りを開きました。

また、新名祭に関する諸リンクをまとめたWebページには次のような記載がある。

人生の節目を、大切にするための日です。

七五三、還暦、古希、喜寿のような年祝い――

けれど、成人式から還暦までの40年間には、そのあいだをつなぐお祝いがありません。

そこで、27歳の誕生日に自分で自分に新しい名前を授ける祭を行います。

人生を終わらせるのではなく、これまでを一区切りとし、新しい始まりを迎えることを目指しています。

またこちらのnote記事では、茶久間氏は新名祭を「新しい冠婚葬祭」と表現している。

閉会の言葉	新名の披露	新名祭音頭	旧名の葬儀	出し物	集合写真撮影	セルフ挙式	亀川の走馬灯芝居	出し物	餅つき	フリーダンス	テープカット	開会の言葉
-------	-------	-------	-------	-----	--------	-------	----------	-----	-----	--------	--------	-------

新名祭の式次第は次のとおりである。

このうち筆者が参加したのはセルフ挙式以降の部分である。閉会後は軽食が用意されており、それらを囲みつつ関係者紹介が行われた。筆者はその途中で退室した。

茶久間氏自身がnoteに「新名祭を説明するのって確かに難しい」と綴っているように、このイベントを一言で定義づけるのは非常に難しいが、概要は掴んでいただけただろうと思う。まずこの物語性について吟味するところから考察を始める。

1-2 新名祭の物語性について

物語性・物語化についての批判は、特に20世紀フランス哲学界におけるポストモダニズムの興りとともに盛んに行われた。リオタールによる「大きな物語の終焉」、フーコーによる「言説」、リクールによる「物語的自己同一性」など、そこでは様々な概念が登場し、網羅的な把握は難しい。ここではある程度まとまった議論のなされた最新の出版物として『物語化批判の哲学 〈わたしの人生〉を遊びなおすために』（難波優輝、講談社現代新書、2025）、そしてポストモダニズム理解の足掛かりとして『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』（東浩紀、講談社現代新書、2001）を多分に参照した。ただし、物語性自体に対する批判は本章では行わない。本章ではこれらの思想を通じて新名祭の物語性を要素に分解し、あるいは新名祭内の出来事がその物語の中でどう位置づけられるのかを整理し、それらの妥当性について吟味する。

1-1において、新名祭が歳祝や冠婚葬祭といった複数の催事の融合体であることを確認した。フランスの社会学者ジャン・ボードリヤールは文化産業社会の未来を予見し、作品・商品においてオリジナルとコピーの中間形態である「シミュラークル」が支配的になると考へた。シミュラークルは「オリジナルなきコピー」などとも説明される。新名祭は催事ジャンルの中のシミュラークルであると言えるだろう。複数の催事を元につくりあげられているだけでなく、その中で複数の催事が特有の意味を持って翻案されているからだ。また、新名祭内では冠婚葬祭を模した行事が執り行われた。我々参列者はその虚構性を受け入れ、新名祭が祀りあげる「なにか」を祝った。東氏は「シミュラークルの支配」と「虚構重視の態度」を、単一の社会的規範が効力を失う「大きな物語の終焉」に対応したポストモダン的特徴として取り上げ、この二点を考察の出発点とし

た。（東氏はこの二つを「ポストモダン」と「オタク系文化」の共通点として取り上げたが、「オタク系文化」の側面には第三章で触れる。）

シミュラークル催事たる新名祭が包含する催事的要素を列挙してみよう。茶久間氏の誕生日を祝う「誕生日会」、27歳を祝うオリジナルの「歳祝」、旧名の「葬儀」、題目としての「結婚式」。そして新たな名前を発表するという「新名祭の中の新名祭の部分＝新名披露」もある。このように多数の要素を持つ新名祭に対する一つ目の大きな批判は、**この「祭」が祀りあげる最大の対象が不明瞭な点**である。より簡単に言えば、対象が新名の「茶久間ふく」なのか旧名の「亀川ふみか」なのか「27」という数字なのか「人としての茶久間氏本人」なのかがわからない。既に紹介した新名祭に関する説明文を見ても、茶久間氏自身が祝う対象をはっきりと理解できていないように思える。種々の催事的要素を虚構性の強い順に並べてみよう。**虚構性の強い順、ということは新名祭における各要素のオリジナリティが強い順**ということである。

要素	結婚式	歳祝	旧名の葬儀	新名披露	誕生日会
対象	茶久間氏 (?)	27歳という年齢	旧名「亀川ふみか」	新名「茶久間ふく」	茶久間氏

左から考える。まずこの「結婚式」（式次第の中の「セルフ挙式」にあたる）が最も異色である。彼女のnoteには次のようにある。

白いドレスを、参列者の手で彩ってもらいます。

みんなにつけてもらった色で生きていく“自己との結び直し”的儀。

色つけの儀式や、フラワーシャワーや北海道から来てくれる小学生来の親友、はるみちゃんからの言葉などがございます。

（結婚式のドレスが白いのは、白色は何色にでも染まる色であることから、白いウエディングドレスを着ることで「あなた色に私は染まります」というメッセージがあるとのことです。あなた色って一体何色でしょうか？

新名祭では、亀川ふみかの好きだったオレンジと、27歳の象徴的カラーである黄緑とピンクの3色をみんなに彩っていただきます。）

二行目がこの「セルフ挙式」の意義を直接的に説明したものと思われる。結婚式の体裁をとったことの意味はよくわからないが、ともあれこの題目の意義は「他者（参加者）を内面化した自己の再定義」と理解できる。

次に「歳祝」の要素である。なぜ「27歳」を祝うのか。パンフレットにはこうある。

5歳の頃、私は27歳に憧れています。

一番好きな数字の年には、

とびきりいいことが起きると信じていたからです。

その他茶久間氏のnoteを読んでも、幼少期から27歳への強い憧れを持っていたことはわかるが、なぜ27歳なのかは不明である。イベントの中心的な数字の意味があやふやであり、根本からイベントの意義が揺らぎかけている。

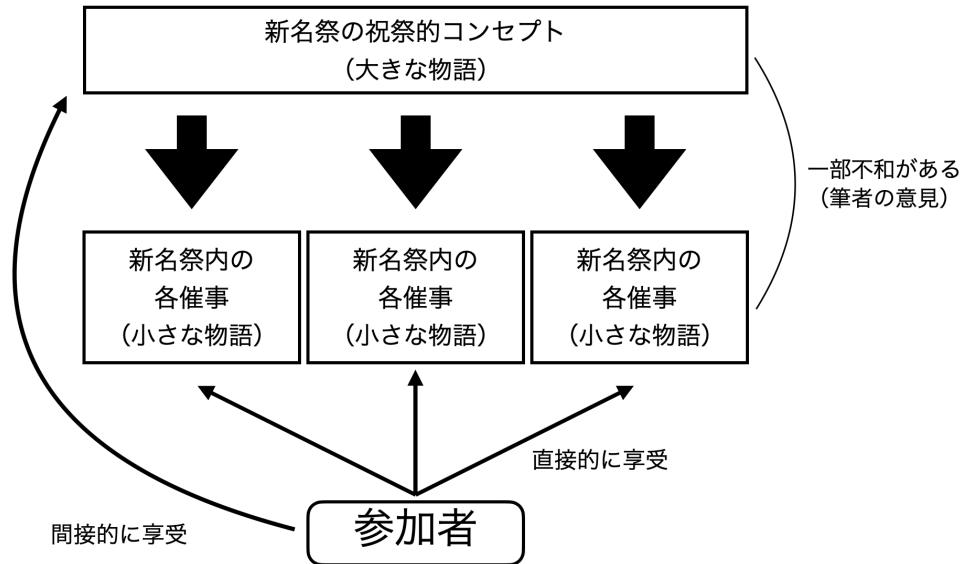
「旧名の葬儀」では『旅立ちの日に』の合唱や花びらを拾い集める「納骨」など、本来の葬儀では考えられない催しがあったものの、翻案として十分に面白く意義のあるものにまとまっていたように思う。（「27」という数字と「死」から容易に連想されるのは「27クラブ」である。憶測になってしまふものの、実際の死を伴わず27クラブにあやかろうとしていたならば非常に浅はかである。）

「新名披露」は薬玉を割り、そこから「茶久間ふく」と書かれた垂れ幕が現れる形で発表された。これ自体に違和感はないものの、旧名を手放す際に「葬儀」というストーリーに則った手続きが踏まれただけに、新名が産まれ落ちる瞬間のストーリーテリングを怠られた印象を受けた。「誕生日会」に対する言及は特はない。なぜならば新名祭が実際的に「誕生日会」であるからだ。

批評家の大塚英志氏は著書『物語消費論』において、シミュラークル消費について次のように説明した。

コミックにしろ玩具にしろ、それ自体が消費されるのではなく、これらの商品をその部分として持つ〈大きな物語〉あるいは秩序が商品の背後に存在することで個別の商品は初めて価値を持ち初めて消費されるのである。

設定・世界観（＝「大きな物語」）を直接商品とすることは難しいため、実際にはその断片である「小さな物語」が商品となる。大塚氏はこの状況を「物語消費」と名づけた。新名祭にあてはめて考えると、「大きな物語」は新名祭を貫く複雑な祝祭コンセプトであり、各催事が「小さな物語」である。ここまで確認した「小さな物語」を時系列順に繋いでみると次のようになる。



「なぜかはわからないが強い憧れのあった27歳の誕生日を機に、なぜか結婚式の体をとって自己を再定義し、再定義した自分を旧名とともに捨て、あっさりと新名を発表した」

新名祭の「大きな物語」の全貌はわからないが、「小さな物語」たちが適切な内容・意味付け・順序で配置されているか疑わしいことはおわかりいただけただろうか。

図1.新名祭における消費活動のモデル

1-3 参加費について

最後に新名祭の参加費について述べる。参加費は2700円である。これが適切であると考えるかどうかは人によって違うだろうが、少なくとも筆者は高額であると感じた。ともあれそれは個人的感想であり、ここで指摘したいのは二点である。

一つ目に金額設定についてである。2700円という金額は27という数字とかけて設定されたのだろう。27という数字の説得力が弱いことは前段で述べた。それゆえ参加費を無理に27と関係させる必要があまり感じられず、不当に金額が高く設定されているようすら思われた。新名祭の内容と照らし合わせた参加費の吟味が行われたか疑問である。

二つ目が主な指摘である。参加費に関する記述がほとんど見当たらなかった。見落としはあるかもしれないが、茶久間氏のSNSやnote記事内にも参加費に言及がなく、参加フォーム記入ページで初めて参加費の存在を知った。これには運営の不誠実さを感じざるを得なかった。

2. 茶久間ふく氏に対する批判

2-1 当日の主催者としての振る舞いについて

前章で新名祭の催事としての性質について考えた。その祝う対象は大きく分ければ「名前」か「茶久間氏本人」である。物質的に存在するのは後者のみであり、それは主催者でもあるため、新名祭という場において中心となる人物が茶久間氏であることは疑いようがない。一方で、中心が茶久間氏であったとしても主役はそうでない場面は多々存在した。例えば葬儀中は、場の主役は棺桶や骨壺や焼香をあげる参列者たちであったと言えるだろう。総じて、開催中の茶久間氏には常に「中心」であることが求められ、「主役」であることが求められているかどうかは場面に依った。茶久間氏が常に場の中心として、場が茶久間氏の望む「開かれた会」になるように行動できていたかには大きな疑問が残る。それは新名祭の主体コミュニティと関係を持っていなかった筆者への関わりであったり、さく氏のnote記事の中にあらわれていただろう。

2-2 茶久間氏のキャラクター性について①

新名祭当日、茶久間氏は「イベント主催者」としてのロールに加え、「舞台俳優」、「花嫁」、「故人」など様々なキャラクターを演じ分けた。『物語化批判の哲学』の中で難波氏は「人は自分をキャラクターにするのが好きだ」と述べ、物語批判の文脈で自己キャラクター化について考察した。物語批判的な考察は後に回すとして、茶久間氏の多層化した、かつ頻繁に変容するキャラクター構造が当日の彼女のオペレーションに混乱をもたらしていたことは考えられる。

2-3 改名のラグについて

11月27日に旧名を弔い新名を得た茶久間氏だが、諸SNSの名義を旧名から変更するに一週間程度の時間を要した。改名に関する部分は茶久間氏の活動と新名祭の現実と虚構を橋渡しする最重要部分であることは容易にお分かりいただけるだろう。新名祭の存在意義が非常に軽薄化してしまった大きな要因である。

3. 夜学バーとの関係に基づく批判

3-1 夜学バー店と「スタンス・スタイル」の確認

ここまで新名祭と茶久間氏に対する意見を述べてきた。新名祭に参加した経験を通して最も不可解に、そして残念に思う点は彼女が元夜学バー従業員である点である。『夜学バーのつくりかた。』をもとに、その店とを部分的に、平易にまとめることを試みる。人間関係において「コミュニケーションが次回に持ち越される」と「三者以上の参加」の二条件を満たすと「コミュニティ」が成立する。「コミュニティの全メンバーとのコミュニケーションの保持」を条件とし「常連」という存在が成立する。こういった「場のコミュニティ化」は人の社会性の性質的に自然なもののだが、その力学に抗い「できるだけコミュニティ化しない場」を目指しているのが夜学バーである。店主のJacky氏をはじめとする従業当時の彼女を知る人々の意見をまとめると、**彼女は夜学バーの理念に強く賛同していたようである。**

また、この後の考察をわかりやすくするために「スタンス」と「スタイル」という概念について整理しておく。本文における「スタンス」とは店（、イベント、場）のアイデンティティのうち形而上の部分、スタイルは形而下の部分である。『夜学バーのつくりかた。』の言葉を借りるならば店の「理論」と「実践」とも言い換えられるだろう。また、物語消費の観点で考えるならば、「スタンス」が「大きな物語」、「スタイル」が「小さな物語」と対応する。

3-2 「女の店」に関する考察

コンカフェ、ガールズバー、キャバクラなど、店員である女性とのコミュニケーションが主たる商品・サービスとなって成立している店が多数ある。いわゆる「女の店」である。これらは夜学バーと根本的な「スタンス」が全く反対である。なぜなら「女の店」の主な商品たる「店員女性とのコミュニケーション」はいわば「閉じた場」であり、夜学バーの最も重要な商品は常に「開かれた場」であるからだ。

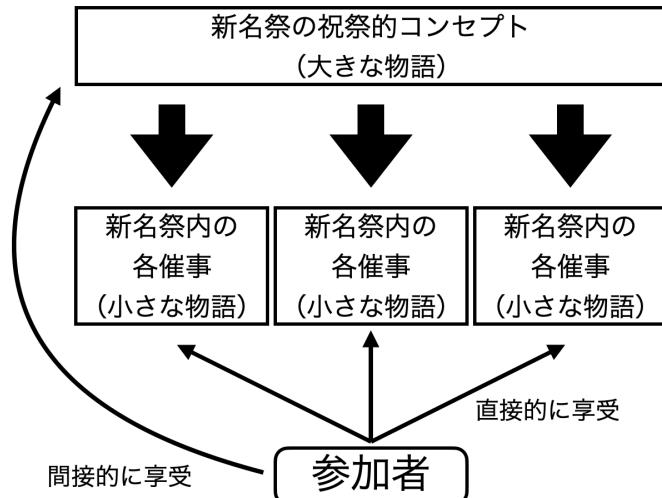
夜学バー近辺にもいくつか「女の店」がある。繁華街の中でも文化的な色が強い湯島には文学・美術・オタク系文化など、カルチャー色の非常に強い「女の店」が存在する。こういった店は夜学バーとその「スタイル」の一部を共有しつつも反対方向を向いた「スタンス」で営業されている。（そのうちのある店を仮にAとする。）筆者が新名

祭に参加して茶久間氏に抱いた第一印象は、もともとAの従業員だったのだろうかということだった。その印象はイベントが先に進むにつれ強まった。**筆者の目に映った新名祭はまさしく「女の店のバースデーイベント」であった。**

第一章で新名祭のもつポストモダン的特徴として「シミュラークルの支配」と「虚構重視の態度」、そして「物語消費」をとりあげた。そこでも少し触れたように、これらはオタク的文化社会における消費活動の特徴でもある。第一章と第二章では新名祭がもつ「大きな物語」と実際の行事や茶久間氏の行動による「小さな物語」の不和について主に指摘した（図1）。ここではその構造について改めて考え、新名祭を貫くコンセプトの裏にさらに大きな物語があった可能性を指摘する。

第二章までの考えでは、新名祭のコンセプトが大きな物語であり、それは分割され、新名祭において小さな物語の連続として実際に表現されていた。また、大きな物語自体の説明も試みられていた。しかしながら実際には、「茶久間氏のパーソナリティ」あるいは「参加者と茶久間氏の関係の変容」が明文化されない本質的な商品として存在していたのではないだろうか（図2）。茶久間氏自身が（恐らく）この構造に無自覚であり、その脱構築を試みなかったことが、新名祭が「閉じた場」となってしまった一番の要因であると考える。無自覚に中心人物とのコミュニケーション、コミュニティの維持が実質的な商品となり、それを消費者が求めるならば、その構造は「女の店」と同じになり、コミュニティを主体とする「閉じた場」とならざるをえない。（茶久間氏が女性であることはその一要素となっている可能性があるが、本質的問題でない。）「複数人で」「文脈を持ち越す」という「常連的コミュニティ」成立要件を十二分に満たしてしまうからだ。（この「脱構築の試み」は夜学バー的営業の実践の中で須く培われているべきものであるが、新名祭でそれがみられなかつたことが残念である。）

【第二章までの議論】



【ここで提案する構造】

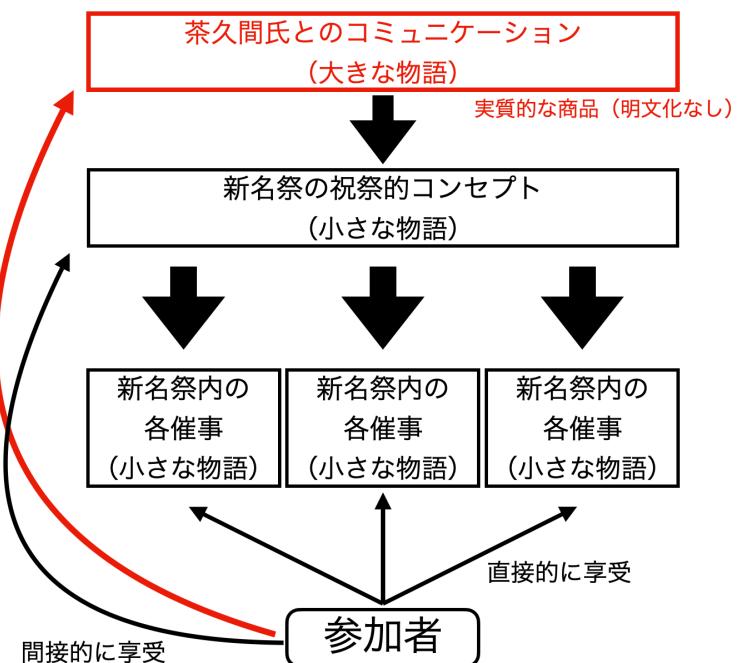


図2.新名祭における消費活動の再構築モデル

3-3 物語化の是非について

ここまで新名祭にまつわる物語性自体については受け入れて考察を進めてきた。ここで、そもそも物語性を持つこと自体について考えてみたい。というのも、**物語性は閉じたコミュニティ構造と非常に相性が良いからだ。**

3-3-1 新名祭の物語性

これまで述べた通り、新名祭は強い物語性を持ったイベントである。それは茶久間氏の半生の総括→改名という情報としての物語だけではない。茶久間ふく=主役、その他の27歳の演者や関係の深い参加者=主要な登場人物（走馬灯芝居の演者が27歳であるなど、制作側の人間には27歳が多かったようである）、さく氏を含めた外部の運営陣や関係の薄い参加者=主要でない登場人物、といったように**新名祭は構造的な物語性を強く持つ**。フーコーは著作『知の考古学』、『言語表現の秩序』の中で物語言説と

権力との結びつきについて説いた。その効果の一部を非常に簡略に挙げると「因果関係の設定」や「主体とそれ以外の区別」などがある。新名祭の構造的な物語性はより中心的な人物（＝茶久間氏に近い人物）により強い権力を与え、さく氏をはじめとする外縁の人々への不誠実な対応を引き起こしたようである。その外縁の人物の1人と知り合いであるだけの、茶久間氏と最も遠い人物＝筆者は当然新名祭の物語の中で解釈できず、それは無関心・不干渉という形であらわれた。

3-3-2 茶久間氏のキャラクター性について②

2-2において部分的に触れた茶久間氏のキャラクターづけについて、保留していた物語批判的な考察を試みる。難波氏は自己キャラクター化の構造を次のように説明している。

① キャラクターをアニメートする

② ①でアニメートしたキャラクターを用いて、自己のスタイルを体現する。

例としては、MBTI診断やADHD/ASDあるあるを通じて人々が共感の輪を広げていたり、自分がどのような性格でありたいかを宣言したりしていることが取り上げられた。この構造を新名祭における茶久間氏の自己キャラクター化に当てはめると次のようになる。

① 新名祭の題目を考え、各場面に応じた自身のロールを創作・規定する

② 新名祭に応じてそれらを演じ、（それが理想か現実かに関わらず）自己のパーソナリティを表明する。

自己キャラクター化とは、言い換えれば自己パーソナリティの物語化である。この物語化が抱える主要なリスクが二点ある。

一つは、そのキャラクターを自己の本質とみなしてしまうことによる自己の可能性の喪失である。リクールが人間の自己理解を「物語的自己同一性」として捉えたように、自己理解には物語的に行われることが必要な部分があるが、当然全てを物語的に理解することはできない。新名祭における、強烈な物語性の中での自己理解には、そこからこぼれ落ちた様々な可能性が存在する気がしてならない。

二つ目の大きなリスクは、その自己アニメートの実践が周囲の人間に物語性を押し付けてしまうことに依る。これ自体は実際に新名祭で起こっている状況である。難波氏はコスプレや「なりきり」が時に羞恥や軽蔑を他者に催させてしまうことを例示した。虚構的な振る舞いが現実の文脈に接合できない形で行われてしまうことが問題なのである。

る。新名祭における茶久間氏の虚構的ロールプレイ（＝「小さな物語」の一部）が現実の文脈に接合できる形であったのかどうか。第一章と第二章で述べた通り茶久間氏の振る舞いと新名祭コンセプトの文脈には不和があり、この視野内において彼女の自己アニメートが効果的であったとは思えない。問題を複雑にしているのは図2で示した「大きな物語」、つまり実質的な商品が茶久間氏本人であるという可能性である。コスプレイヤーのファンにとって、それが行われる場面があまりに非常識でない限りコスプレは嬉しいものとして機能するだろう。（無自覚に）茶久間氏本人を商品として消費するために参加した人にとって、彼女のロールプレイの不整合は些末なことなのだ。ファンでなければ楽しめないイベント。この状況が茶久間氏とそのファンダムという閉じたコミュニティを強化・固定化するものであり、3-2で述べた「女の店」的であることはご理解いただけるだろう。

3-4 開かれた場を作るためには？

総括する。茶久間氏は「開かれた会」を目指したが新名祭はそうならなかった。どうすれば良かったのだろうか？一言で言ることは難しいが、この経験を通じて重要だと考えた点を二点挙げる。

一点目は「メタ認知による脱構築」である。『夜学バーのつくりかた。』でも述べられている通り、店という「場」は（新名祭のようなイベントも当然ながら）「閉じていく」性質がある。常に場における構造・関係を第三者的に観察し、「閉じる」力学を破壊しようとする思考が必要である。これを意識することが、いわば開かれた場を作るために必要な「スタンス」の一つである。

二点目は「実践練習」、つまり「スタイル」を磨くことだ。おそらく茶久間氏は夜学バーにおける就業を経て「スタンス」の理解はある程度深めたものの自分の「スタイル」をつくりあげるにいたらなかったのだろう。仮に理論を完全に理解できたとしても実践できるかどうかは完全に別問題である。また『夜学バーのつくりかた。』実践篇にあるように、内装やカウンターの形など、人間や物質の配置・動線の設計といった要素も開かれた場の実現のために非常に重要である。この重要性を十分に彼女が認識して実践できているとは、新名祭のレイアウトを見る限り思えなかった。こういった「スタイル」に直結する「スタンス」理解も必要である。彼女が今後同じ思想を持って活動を続

けるならばより「スタンス」を磨いてくれることを期待するが、その絶好の機会である夜学バーでの従業を辞めてしまっていることが残念でならない。

あとがき

散々文句のような文章を書いてしまったが、筆者は新名祭に参加して心から良かつたと思っている。ここ数ヶ月強く関心のあった「場」の理論と「物語性の暴力」についてまとまった考察を行う契機となったからだ。この文章がどれほどの人々に届くかはわからないが、これから少しでも多く「開かれた場」が生まれることに繋がればこれ以上の喜びはない。

この文章では、夜学バー店主であるJacky氏の個人的意見をなるべく排除し、夜学バーの理念として表明されている内容のみに絞って参考するように努めた。しかしながら彼のホームページ (Entertainment zone、通称Ez) には夜学バーの理念とも関連する様々な思想が綴られており、興味深い内容も多い。この文章を最後まで読んだ方の中にEzを知らない方がいるとは思えないが、この場を借りて紹介させていただく。

Jacky氏との約束によりこの文章の締め切りは2025年内と設定されていたが、様々な参考文献のチェックや内容のブラッシュアップに多大な時間を要し、年明けの公開となってしまったことをお詫びする。

謝辞

この文章の執筆にあたって多数の人々の意見、著作、証言を参考にさせていただいた。名前のわからない方や名前を文章に載せてもよいかわからない方もいるため列挙は差し控えさせていただく。また参照したいいくつかのwebページについては都度リンクを設定したが、漏れがあればご連絡いただきたい。それら全てと、新名祭に関わった全ての人に対して、末筆ながらこの場を借りてお礼申し上げる。